

「あの時・あそこ」から「今・ここ」へ

東京大学大学院人文社会系研究科文化資源学研究専攻
李貞善

【場面 #1】

今から70年前の1952年の初春、ある若い兵士が朝鮮戦争の最中に戦場から一時帰郷し、家族とともに幸せなひと時を過ごしていた。彼の名前はウィリアム・スピークマン (William Speakman)。彼は小さな娘を膝の上に座らせたまま、家族に囲まれて夕食を食べていた。こじんまりとした一般家庭の、平凡な父親の姿であった。

【場面 #2】

1964年の春、韓国・釜山の国連記念墓地（現在は国連記念公園）では、朝鮮戦争での英連邦軍の犠牲を記念する英連邦記念碑の除幕式が挙行されていた。スピークマン氏は、イギリスを代表する軍人として戦友たちと一緒にこの記念碑の除幕式に出席した。

上記の場面に連続して登場するスピークマン氏は、朝鮮戦争に参戦したイギリス出身の元国連軍兵士であった。1951年11月4日に繰り広げられた臨津江（イムジンガン）地域の戦いでは彼が活躍したおかげで、多くの戦友たちの命が救われた。

2018年に90歳で召天したスピークマン氏は翌年、生前の自らの遺志の通り、「第二の故郷」の国連記念公園に奉安された。スピークマン氏の葬儀は、彼の遺族をはじめ、イギリスおよび韓国の政府関係者、多くの市民たちが見守る中、厳かな雰囲気の中で執り行われた。

ここで、冒頭に話を戻してみよう。スピークマン氏が登場する二つの場面は、私が博士論文に関する調査を行う過程で発見した歴史映像の中のシーンであった。朝鮮戦争勃発70年を迎えた2020年に、学術研究の結果、彼の軌跡を探り当てることができたのである。

場面#1の白黒の映像に見られるスピークマン氏は、始終一貫微笑み、至福の様子であった。英連邦軍の公式の催しに出席した堂々とした様子（場面#2）よりも、自宅で家族と過ごし、父としてささやかな幸せを感じている様子の方が、何故か私の心に深い余韻を残した。それは、彼の姿と、長らく実家を離れて留学している自分の姿が重なったためだけではないだろう。

二本の映像をしばらく見つめていた私は、2019年のスピークマン氏の葬儀の時、彼のご子息たちが一緒に訪韓したことを思い出した。そして、博論がきっかけとなり日ごろ連絡をしている国連記念公園の関係者に、以下のようにメールを送った。「貴国連記念公園の奉安者であるスピークマン氏が登場する希少な映像を見つけました。もし可能であれば、この映像を関連する方々にお伝えいただけますでしょうか。」そうすると、間もなく公園の関係者から返信が届いた。

「スピークマン氏のご子息の一人とこの映像を共有しました。（…）彼はその映像を初めて見たようで、1964年に父親が国連記念墓地を訪れたことを知らなかったということでした。もちろん、彼はこの映像が発見されて、非常に喜んでいます。」

このことが契機になり、私は研究者として知識を蓄積する努力以上に、その知を社会に広く還元する実践の重要性を身をもって実感した。知識の習得が「物事の一端を知ること」を意味するならば、知識の実践は、まず理論である知識を確立したうえで、物事の本質を見極めて、人類や社会に貢献する営みではないか。日本で留学し、約7年間にかけて研究に取り組んできている私の立場からすると、これまでの自分の活動は知識を体得することに重点がおかれていたといえる。しかし、真の研究者を目指すには、そのような個人的な次元の知識の習得を発展させ、知識の共有へと結実することがさらに大事であろう。この内容を冒頭の場面に当てはめると、従来为国連記念公園に関連する歴史や人物を知ることが一次的な知識習得の行為であったとすれば、これからは学術的な知の意義を国連記念公園の関係者たちとスピークマン氏のご子息と分かち合って社会に発信することが二次的な知の構築行為になると考えられる。

スピークマン氏の映像を手がかりに、私は研究を通して「あの時・あそこ」のヒト・モノ・コトが、結局「今・ここ」に帰結するという悟りを得た。「今・ここ」の私が、「あの時・あそこ」のスピークマン氏の足跡を彼の遺族に取り戻してあげたように。この映像を通して亡き父の生前の姿を目にした時のご子息の感動は、計り知れないものである。

過去から構築されてきた知を体得するとともに、善意の知を実践していくこと。「あの時・あそこ」から「今・ここ」にも通用する有効な示唆点を導き出し、平和で包摂的な社会の一助となることが、一人の研究者、そして21世紀のよき地球市民としての役割ではないかと思う。その延長線上で、朝鮮戦争にちなんだ文化遺産を研究する立場から、地球市民がお互いに共鳴するという自覚と連帯感を持ち、目下のロシアのウクライナ侵攻にも深く心を痛み憂慮する。

早く戦争が終わり、70年前のあのスピークマン氏のように、すべての戦闘員・非戦闘員が無事に家に戻り、愛する家族とまた至福の日常を過ごす日がくることを願ってやまない。